

編集後記

先日、日本小児科学会岩手地方会が、Webカンファレンスとして開催されました。四国同等の面積を持つ岩手県では、以前から県域全体をカバーする遠隔診断システムが構築・確立され、日々の診療に役立っておりましたが、今回の新型コロナウイルス感染症拡大を受け、朝の小児科カンファレンスにも活用した結果、複数の関連病院をまたいだ拡大カンファレンスが常態化しました。その最中の地方会では、普段以上に活発な意見交換が行われ、また特別講演を東京から届けていただき、大変な盛況のうちに閉会となりました。地方と都心・世界はほとんど距離がないことを再確認できた素晴らしい会でした。

医学雑誌もオンライン化が進み、数分で最先端の情報・技術を見聞きし、著者への質問や試薬提供の依頼も容易となりました。呼応するように、和文誌である日本小児循環器学会誌もオンライン化し、その役割は既存技術や知識の再確認、新技術の日本での汎用性確認等の情報共有に変化を遂げ、36巻2号にも国内向けの重要な情報が掲載されています。一方、海外の医師と意見交換してみると、これらの総説や症例報告は、日本の小児循環器病学の歴史や本邦独自のきめ細やかな臨床の機微、緻密な観察によって生まれた習慣などが反映され、実は世界の小児循環器内科・外科医・コメディカルにも共有していくべき重要な情報を含んでいることにも気づかされます。日本小児循環器学会からは英文誌も刊行され、日本語というブラックボックスからの脱却も進んでいます。日本小児循環器学会が世界に冠たる学会に発展していくために、学会誌はどうあるべきか、活発な議論を期待したいと思います。

(齋木宏文)